厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策政策研究事業
都市部の若者男女におけるHIV感染リスク行動に関する研究

Webによる若者のHIV/STI感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究代表者：日高　庸晴　（宝塚大学看護学部　教授）
研究協力者：松髙　由佳　（比治山大学現代文学部　准教授）

研究要旨

Webを用いた効果的な予防介入を実施するために約2分間の予防啓発動画の効果評価をインターネットモニターを対象に行った。動画視聴あり群（300人）と動画視聴なし群（200人）で比較したところ、1）梅毒の流行、2）HIV治療によってすぐに死ぬ病気ではなくなったこと、3)HIV抗体検査で女性の場合内診はないこと、4)HIV抗体検査で男性の場合ペニスの検査はないこと、5)コンドームを持ち歩く時に財布の中に保管することは適していないこと、6)選び方次第でコンドームを使ったセックスはもっと楽しくなること、いずれの項目においても介入群において有意な効果が認められた。短時間でインパクトのある効果的なメッセージになったため、その活用方法などの検討も併せて必要である。

A. 研究目的

本研究の目的は、インターネット利用層を対象にWebによるHIV/STIおよび検査勧奨のための短時間かつ印象に残る予防メッセージの効果評価を行うことである。

B. 研究方法

予防介入コンテンツをインターネットモニターに視聴させ、無記名自記式質問票による前後比較試験を行った。インターネットモニターの取り込み基準は1）18歳～35歳の男女、2)過去6ヶ月以内に配偶者・パートナー以外とコンドームを使わない性経験がある、3）全国の都市部（札幌市・仙台市・千葉県・埼玉県・東京都・神奈川県・名古屋市・京都市・大阪市・堺市・神戸市・福岡市）在住であることとした。動画視聴あり群（男女各150人、計300人）、対照群として動画視聴なし群（男女各100人､計200人)に二群化したうえで、動画の効果評価を行った。対照群は最後に動画を視聴するよう配慮した。

動画の内容は研究2年目にクラブ調査で用いたものを修正し、内容は男女共通とし、時間は約2分間とした。登場する語り手の男女2人がHIV/STI予防についてクイズ形式で掛け合いをして、情報量を盛りだくさんにせず、若者にわかりやすく伝えるよう努め重要なメッセージは字幕で強調・目立たせる工夫をした。主なコンテンツは以下の通りである。

1）2018年は梅毒の年間患者数が6,000人を突破したこと（正解○）
2）エイズにかかるとすぐに死ぬ（正解×）
3）HIV抗体検査では、女性の場合は内診（膣の検査）がある（正解×）
4）HIV抗体検査では、男性の場合ペニスの検査がある（正解×）
5）コンドームを持ち歩くには財布に入れておくのが最も良い（正解×）
6）選び方次第でコンドームを使ったセックスはもっと楽しく出来る（正解○）

（倫理面への配慮）

宝塚大学看護学部研究倫理委員会による研究計画の審査と承認に基づき研究を実施すると共に、質問票回答前に厚生労働科学研究の一環として実施する調査であることを記し、研究参加の同意を得られた場合のみ回答を求めた。

C. 研究結果

動画視聴あり群、視聴なし群ともにほぼ同様の基本属性であった。年齢構成は20代と30代が大半であり、最終学歴は大学卒以上が共に6割台であった。過去6ヶ月間の配偶者やパートナー以外の性交相手は9割方が友人、その他は1割程度であった。その際のコンドームの使用状況は7割が使用した時も使用しなかった時もあると回答した。

いずれの項目も動画視聴あり群のみに大幅な知識の上昇が確認され、男女ともにその上昇が確認できた（p<.001）。

1) 2018年は梅毒の年間患者数が6,000人を突破した。（正解○）では、動画視聴あり群の男性で51.3%の、女性で58.7%の上昇が確認された。一方、動画視聴なし群では男性で-1.0%、女性で6.0%の変化があった。
2) エイズにかかるとすぐに死ぬ（正解×）
動画視聴あり群の男性で 15.3%、女性で17.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性-2.0%、女性-1.0%の変化であった。
3) HIV抗体検査では、女性の場合は内診（膣の検査）がある（正解×）
動画視聴あり群の男性で 54.7%、女性で63.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性-2.0%、女性2.0%の変化であった。
4) HIV抗体検査では、男性の場合ペニスの検査がある（正解×）
動画視聴あり群の男性で 48.7%、女性で65.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性では0%、女性で2.0%の上昇と大幅な変化がなかった。
5) コンドームを持ち歩くには財布に入れておくのが最も良い（正解×）
動画視聴あり群の男性で 22.7%、女性で23.3%の上昇があった。動画視聴なし群では-4.0%、女性で 2.0%の上昇と大幅な変化がなかった。
6) 選び方次第でコンドームを使ったセックスはもっと楽しく出来る（正解○）
動画視聴あり群の男性で 34.0%、女性で25.3%の上昇があった。動画視聴なし群では男性で-3.0%、女性で3.0%の変化にとどまった。

D. 考察

すべての項目において介入を行った動画視聴あり群においてのみ有意な変化が認められた。対照群には有意な効果は認められなかった。研究2年目のクラブ調査で用いた動画をベースに一部修正し男女共通のものとして 2 分間におさめた。動画サイトの視聴に親和性が高いと考えられる若者にとって、2 分間が長く感じられるのではないか後半の動画内容について十分な記憶が残らないのでないか等杞憂したが、十分な効果が確認できた。強調したい必要な情報は大きな文字で太字のテロップ（字幕）を活用したこと、効果音を盛り込んだことの影響等であると考えられる。また、若年層での梅毒の流行拡大についてはバラ疹などの症状が発現すること、HIV のみならず性感染症の検査の重要性についても言及した。行動変容を促す具体的提案として、コンドームを持ち歩く際にこういったケースがあるよ、といったアイディアやその実物を見せたことや、コンドームの種類はサイズや形、パッケージ等バラエティに富んでおりいくつかの製品の外箱を実際に紹介することで、選択肢が多くあることを具体的に示したことも功を奏したと思われる。

E. 結論

2 分間の予防啓発動画の効果評価で一定の効果が検証され、若者にとって印象に残る予防啓発の一手法であることが示された。

F. 研究発表

1. 論文発表

（和文）

1. 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性の生きづらさと健康リスク行動,モダンフィジシャン,新興医学出版社,2019年5月号:475-477,2019.
2. 日高庸晴：性指向と性自認の多様性を知る－LGBTs の生徒の存在に配慮するために,英語教育,大修館書店,68(1)：76-77,2019.

3. 日高庸晴：社会調査が示す LGBTs における DV と性暴力被害の現状,地域保健,東京法規出版,2019 年 9 月号：28-31,2019.
4. 日高庸晴監著：LGBTQ をはじめとするセクシュアルマイノリティ授業,少年写真新聞社, 2019.
5. 日高庸晴：多様性が尊重される社会を,手話通訳問題研究,全国手話通訳問題研究所,151：6-7,2020.
6. 日高庸晴：LGTBs の学齢期におけるライフイベントとメンタルヘルス,ストレス科学,日本ストレス学会,印刷中,2020.

2. 学会発表

（国内）

1. 日高庸晴：性的指向と性自認を視野に入れた教育が必要になる根拠：第 38 回日本思春期学会総会・学術集会　シンポジウム (2)「LGBT を人権の視点からどう教えるか」, 2019, 東京.
2. 合田友美, 日高庸晴：クリニックで性感染症検査を受検した男女の性感染症に関する認識－CSW と非 CSW の違いに着目して－：第 38 回日本思春期学会学術集会, 2019, 東京.

（海外）

1. Tomomi Goda, Yasuharu Hikada: Reasons for condom use or nonuse among individuals undergoing sexually transmitted infection examination in Japan:The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science, 2020, Osaka.

G. 引用

なし